様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年　5 月 15 日現在

機関番号：25405
研究種目：基盤研究（C）一般
研究期間：2009～2011
課題番号：21520477
研究課題名（和文）　西日本海域方言における“海上ネットワーク”検証のための記述的・理論的研究
研究課題名（英文）　Descriptive theoretical study for "sea network" inspection in the West Japan sea area dialect
研究代表者
灰谷　謙二（HAITANI KENJI）
尾道大学・芸術文化学部・教授
研究者番号：60279065

研究成果の概要（和文）：本研究は、西日本海域西部域と大陸の間に“海上ネットワーク”が存在し機能したことの検証とその理論化を目的としたものである。伝播ネットワークの存在については今後の研究展開にさらに負うところが多いが、たとえば、出雲方言に特徴的なラ行五段化現象が第一都市ではない出雲から周辺へ伝播するさまや、母音交替、漁労語彙・粉食語彙のデータからネットワーク検証のための記述的理論的分析の土台となるべき大きな成果が得られた。

研究成果の概要（英文）：This study was aimed for the inspection of having functioned and the theorization."Sea network" existed between western part of West Japan sea area and a continent, There were many issues to owe to future study development more, but, for example, about the existence of the spread network, the big result that should lay the foundation of the descriptive theoretical analysis for network inspection from a state and an ablaut, data of the fishery vocabulary, powder food vocabulary which spread from Izumo where chages 1step verbs to“ra”line 5step conjugation which was characteristic of Izumo dialect was not the first city to the outskirts was provided.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語悪・日本語学
キーワード：方言

１．研究開始当初の背景

(1)日本海は大きな「内海」である。船による広域的な活動は縄文以前にさかのぼる。日本列島が大陸と別れ列島化した縄文時代以降、日本海を通じて人と物の交流が行われた。この人類学的な検証と同時に、環日本海という発想にもとづいた文化交流の視点が近年とくに重視されてきた。同様に日本語の形成過程上、日本海という地理的環境が何らかの作用を及ぼしたことは想像に難くない。

日本における方言の地域性がどのように形成されてきたかについては、小林隆の「中央語再生モデル」や安部清哉の「方言形成における４つの層」など、複数の仮説が提出されており、その包括的モデルを構築しようとする試みが行われているが、「方言伝播経路」をどのように考えるかは未解決の大きな課題となっている。一方、「島伝い」の方言伝播は、琉球、天草や瀬戸内海をフィールドにした研究がみられ、その方言伝播については一定の知見が得られている。今回、日本海をその地理的特性から三エリアに分ける発想は、“島をつたう伝播経路”が想定される西日本海域をとらえ、連続的な観点から研究しようとする意図に基づく。

本研究のグループが共同で出雲方言に関する記述的研究を長年行っていく中で、あらためて東北方言と出雲方言の類似性は見逃すことのできない、説明を要する現象であることを再確認してきた。例えば、いわゆる出雲方言にも東北方言にも見られる一つ仮名現象など地理的に離れた２つの地域に同様の現象が見られるのはなぜか。これは研究史上、接触伝播によるものであるとは積極的に説明されてこなかった。このような現象を、伝播・交流の現象として結び付けうるのか、何らかの伝播関係を確認できる現象は存在するのか。これらを、あらためて検証・記述し、最終的には言語伝播のネットワークモデルを提出することが本研究のめざすところである。

日本における方言の地域性がどのように形成されてきたかについては、小林隆の「中央語再生モデル」や安部清哉の「方言形成における４つの層」など、複数の仮説が提出されており、その包括的モデルを構築しようとする試みが小林隆を代表とする東北大学方言研究センターなどのグループによって行われているが、「方言伝播経路」をどのように考えるかは未解決の大きな課題となっている。一方、「島伝い」の方言伝播は、琉球、天草や瀬戸内海をフィールドにした研究がみられ、「島伝い」の方言伝播については一定の知見が得られている。今回、日本海をその地理的特性から三エリアに分ける発想は、“島をつたう伝播経路”が想定される西日本海域をとらえ、連続的な観点から研究しようとする、初のものである。

本研究メンバーは出雲方言に関する記述的研究を長年行っている。その研究の中で、東北方言との類似性は見逃すことのできない現象であることが判明している。しかし、その類似性の原因はまだ解明されていない。例えば、いわゆるズーズー弁と言われる音声上の特徴は、出雲方言にも東北方言にも見られる。地理的に離れた２つの地域に同様の現象が見られるのはなぜか。単に「飛び火的伝播」と言ったのでは、説明になっていない。

(2)でのべた目的意識にそって研究期間内に以下の作業をおこなった。

①環日本海の文化交流を３区分し、大陸側のルートとの対応を考慮したうえで、 特に西部日本海の 壱岐対馬・北部九州・隠岐出雲の方言を総括的に記述する。その際、音声、文法、語彙、表現法を主な記述対象とする。

②「海上ネットワーク」という仮説を立て、記述で得られた結果をもとに、その検証を行う。その際、日本の他地域で得られた「島伝い」の方言伝播に関する知見との比較対照を行う。

③東北日本海や中部日本海との関連性、日本海海上ネットワーク全体の中での西日本海の位置付けについても考察する。

かなり性質の異なると考えられる九州西部海上ネットワーク、及び琉球海上ネットワークとの比較は、メンバーである有元の研究課題とリンクし、中部域、東北域との比較は同じくメンバーである岩城・小西の研究課題とリンクしていくことになる。また、それぞれの研究分野は上記の記述対象と一致する。

以上の作業を通じ、海上ネットワークの存在とそのメカニズムの理論的解明をめざす。

(3)研究の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義は次のようなものであった。

「海上ネットワーク」という新概念

日本海沿岸における言語伝播を「海上ネットワーク」という概念で捉えることに本研究の特色がある。しかしながら、すべての地域での伝播を同質のものと捉えるのではなく、性質の異なった三つの海上ネットワークが連続しているものと仮定し、それらの相互関係を究明するという方法を採る。ここにおいて他の研究グループとの交流がうまれ、解明に向けての相乗効果が現れることが期待される。

ここで浮上する北陸・東北と、西日本海域のあいだに果たして海上ネットワークが存するか否かの検証課題は、日本方言研究史において未解決である出雲方言の存立過程を明らかにする視点となり、ひいては日本方言の形成過程解明の一大重要項目を解決する糸口になると考えられる。

２．研究の目的

日本海域を、東北沿岸・中部・西部の三つのエリアに区分し、それぞれのエリアにおけ

る大陸との交流ルートとその相互作用を仮定する。その西部域を西日本海と呼び、ここに対馬、壱岐、隠岐、北部九州そして出雲地方の間に言語交流が存在し、その伝播ルートである「海の道」が存在することを、方言学の見地から実証しようとする。すなわち伝播経路として想定される“海上ネットワーク”の存在と、その機能を検証していくための記述的・理論的研究である。

そのために、ネットワークによってエリア化されると仮定される、北九州から山陰海岸周辺域の方言の記述的研究をおこない、その方言体系間の一致／不一致あるいは相違・類似のパターンを読みとることで、方言間の影響関係を明らかにし、そこから伝播を仲立ちする陸づたいではない伝播、海の道による伝播の存在を確認しようと言う作業である。

この「島伝い」の言語交流に対して、主な島を間に挟まない地域、つまり「島伝いではない」北陸（これを中部日本海とよぶ)、東北地方および北海道南部（これを東北日本海と呼ぶ) の「海の道」との比較が課題になる。前者は渤海などとの交流が記録に残り、後者は大陸との交流に関する明確な記録が残っていない地域である。大陸との交流が、日本海を通じてどのように日本に入り、さらにそこから日本海が交通路としてどのような役割を果たしてきたのかが課題となる。さらには、九州西部海上ネットワーク、及び琉球海上ネットワークとの比較、北方の海上ネットワークとの比較を将来的な視野にいれた研究へと展開させることが将来的な研究射程に入ってくる。

海に囲まれた日本列島とその周辺域の、巨視的な海上ネットワークによる言語流通のありかたについての理論的枠組みを構築することをめざすことは、つまるところ、日本語や日本人がどう形成されていったかという大きな問題を解明するための一階梯であるともいえよう。

３．研究の方法

この問題意識にしたがって次のような研究大綱が考えられた。

（１）環日本海の文化交流を３区分し、大陸側のルートとの対応を考慮したうえで、 特に西部日本海の 壱岐・北部九州・隠岐・出雲の方言を総括的に記述する。その際、音声、文法、語彙、表現法を主な記述対象とする。

（２）「海上ネットワーク」という仮説を立て、記述で得られた結果をもとに、その検証を行う。その際、日本の他地域で得られた「島伝い」の方言伝播に関する知見との比較対照を行う。

（３）東北日本海や中部日本海との関連性、日本海海上ネットワーク全体の中での西日本海の位置付けについても考察する。

本研究はこの（１）段階に相当するものである。

九州西部海上ネットワーク、及び琉球海上ネットワークとの比較は、有元の研究課題とリンクし、中部域、東北域との比較は同じくメンバーである岩城・小西の研究課題とリンクしていくことを想定したものであった。それぞれの研究分野にそった作業を通じ、海上ネットワークの存在とそのメカニズムの理論的解明をめざした。

研究期間は３年とし、１年目は出雲方言を中心とした中国地方の日本海沿岸諸方言の研究、２年目は北九州の日本海沿岸諸方言の研究、３年目は「海上ネットワーク」の検証と記述を行い、他の海上ネットワークエリアとの比較にむけた総括・整理をおこなうこととした。東北日本海や中部日本海との関連性を明らかにし、日本海海上ネットワーク全体の中での西日本海の位置付けをおこなうことをその将来的課題として設定した。

いずれの年も、記述的研究と理論的研究のインタラクションをしていく。大陸から竹島をへて隠岐にわたり山陰海岸へ達するルートを想定した調査であった。現在研究グループとして継続調査を行っている出雲地方の研究を前提としている。特に石見・出雲・隠岐の山陰ルート調査となる。大陸から、壱岐・対馬を経て、北部九州に達するルートを想定した、第二の島伝いルートの調査となる。年間の調査可能回数は一人当たり２回程度と考え島根県の出雲･石見・隠岐３区域を中心とした体系調査を行なった。今次研究は海上ネットワークの存在を仮説・検証する模索的研究と位置づけ、調査は、最終的な海上ネットワーク理論の構築にむけ、東北との共通性を示す中舌母音等の音声項目、・動詞活用、敬語体系・表現法などの体系的記述につながる項目をねらった。あわせて民俗学的な交流を検証できる漁労語彙等の調査を企画した。日本における瀬戸内海、西九州、中部・東北日本海等の他の海上ネットワークエリアとの比較を念頭にいれた総括・整理と、海上ネットワーク理論構築のための検証と記述をおこない、日本海における海上ネットワーク全体の中での西日本海の位置付けをおこなうこととした。

４．研究成果

(1) 有元光彦は音韻分野について以下のことを明らかにした。

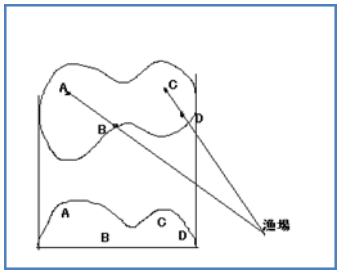
出雲の９方言を対象とし母音交替現象を記述した。ここには sonority と coronality がかかわり、高母音交替では「相対的に低 sonority

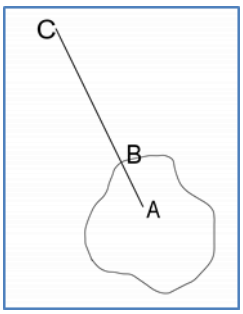
が、非高母音交替では相対的に低 coronality が指向されていることが仮定され、この指向性は地域差と関連すること、すなわち高母音交替現象においては、宍道、大根島、江島方言では相対的低 sonority、その他の平田、斐川、美田、五箇の各方言では相対的高 coronality が指向されていることが予想された。

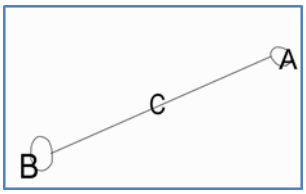
（2）小西いずみは文法分野においていわゆる一段動詞のラ行五段化現象を扱い、出雲方言のたとえば否定形のミラン、命令形ミレなどが、否定・命令・使役・意志・取り立て否定でそれぞれ地理的分布が大きく異なること。否定・命令・使役・意志のラ行五段化は出雲北西部に盛んで東部・南部には弱いこと。取り立て否定のラ行五段化に限っては出雲東南部にもおこることを指摘し、その成立過程を北西部で先行し、周囲に伝播需要したと考えた。出雲方言域のラ行五段化は古態残存ではなく新変化であり、北西部発信、しかも中心地ではない出雲市からのものであることを特徴とすることを明らかにした。

（3）岩城裕之は餅・ダンゴ食に関する語彙を対象として次のことを明らかにした。
全地点でモチ・ダンゴにおけるモチ優勢の状況があること。常食か行事食かで北部九州と出雲に差があること、、中間種をモチに分類する出雲と、ダンゴに分類する北部九州という対立傾向があること。内容物を名称に取るモチ・ダンゴは常食とする出雲にあり、北部九州には制限がないことを明らかにした。

（4）灰谷謙二は出雲・隠岐・壱岐対馬・平戸の各漁業従事者の漁場確定語彙を対象とし、地形・地理的環境に応じた漁場確定の方法があり大きく 3 つに類型化できること、またそれを反映した語彙の発展が認められることをあきらかにした。ともに山をみながら二本の目標線を交差させる原理をもちつつ、グリッド状の縦横メッシュ構造をもつもの、出入港の方向と航続時間で場所を特定するもの、二地点を結ぶ中間点に場所を特定するものの三つの形が、それぞれの環境に応じて用いられ発達することを明らかにした。







各分野において、北部九州・出雲地方の対象とした各分野の記述的調査については重要なデータが集まった。企図した“伝播”現象を確認できるものは小西の見出した出雲地方内部の文法現象におけるものがあるが、西日本海のダイナミックな相互交流を明確な形で証明することは現段階ではまだ十分でない。底流に痕跡的に残る形での海上ネットワークの存在は、歴史的経済的にも証明可能なものであろうが、言語面において海が運ぶ言語現象をこれと特定すること自体のむずかしさをまずもって確認した段階と言えよう。分野的には人的交流と文化経済とのかかわりがダイレクトに言語に影響を及ぼす語彙面の調査をさらに焦点化し密度を濃いものにすることが必要となろう。

また、日本海沿岸中部・東部域との連携を視野にいれた研究と、方言から日本語の形成過程をさぐることを課題とする研究との協力・連携も必要になると考える。

また、海上ネットワークを裏で支える陸路のネットワークのありかた、特に中国地方の言語流通経路としての役割を明らかにし、この角度から海上ネットワークの存在を実証することも必要になる。これらは今後の課題である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 9 件）

① 有元光彦 2012「出雲方言における母音交替現象」『科研研究成果報告書』査読なし 9-35p. p.
② 岩城裕之 2012「西日本海地域のモチ・ダンゴ類語彙」『科研研究成果報告書』査読なし 57-71p. p.
③ 灰谷謙二 2012「隠岐二地点方言の風位語彙と漁場特定語語彙―中村と西郷にみられる地理的環境の比較から－『尾道大学芸術文化学部紀要』第 11 号　査読なし 45-51p. p.
④ 岩城裕之 2011「餅・団子類の地域性と連

続性―北部九州から山陰地方を対象に―」『語彙研究 9 号』語彙研究会　査読有　78-85p. p.
⑤　小西いずみ 2011「出雲方言における「一段動詞のラ行五段化」に関する覚書」『論叢国語教育学』復刊第 2 号／通巻 7 号(広島大学国語文化教育学講座）査読なし 49-60p. p.
⑥　灰谷謙二 2011「漁場の地理的環境と漁場特定語彙」『尾道大学日本文学論叢』第 7 号　査読なし　15-25p. p.
⑦　植木香織・灰谷謙二 2011 「長崎県対馬市美津島町方言の漁場特定語彙―ヤマアテにみられる開放系漁場の特徴―」『尾道大学芸術文化学部紀要』 第 10 号査読なし 61-70p.p
⑧　岩城裕之 2010「島根県隠岐・出雲地域における餅・団子類語彙―稲作を中心としない 2 地点の比較から―」『語彙研究 8』語彙研究会　査読有　22-31p. p.
⑨　灰谷謙二 2009「出雲地方の漁業集落の風位語彙と漁場確定語彙―出雲市小伊津町方言からみる開放系漁場の特徴―『尾道大学日本文学論叢』第５号　査読なし　21～35p.p.

６．研究組織

(1)研究代表者

灰谷　謙二（HAITANI KENJI）
尾道大学・芸術文化学部・教授
研究者番号：60279065

(2)研究分担者

友定　賢治（TOMOSADA KENJI）
県立広島大学・保健福祉学部・教授
研究者番号：8010632

有元光彦（ARIMOTO MITSUHIKO）
山口大学・教育学部・教授
研究者番号：90232074

岩城裕之(IWAKI HIROYUKI)
呉工業高等専門学校・一般科目・准教授
研究者番号：80390441

小西いずみ（KONISHI IZUMI）
広島大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：60315736

(3)連携研究者

なし